

令和6年度 江戸川区立下鎌田東小学校 学校関係者評価報告書（学校経営計画・学校関係者評価シート）

学校教育目標	「考える子」・・・生涯にわたって学ぶ意欲をもち、生きる力の基となる考える力を育成する 「思いやりのある子」・・・自分も相手も大切に、豊かでしなやかな心を育成する 「たくましい子」・・・健康な体をつくり、粘り強くやり抜く力を育成する社会の変化に対応し、自らの力で未来を切り拓き、新しい価値を創造できる力の育成		目指す学校像 目指す生徒像 目指す教師像	・笑顔と活力にあふれ、児童一人一人が自分のよさを発揮できる学校 ・考える子 思いやりのある子 たくましい子 ・全ての教職員が協働し、質の高い教育活動の実現を目指す教師
前年度までの本校の現状	成果	全国学力調査において、国の正答率を上回り、都平均に迫っている。また、CD層の割合も改善している。引き続き、基礎・基本の習得に力を入れるとともに、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善に力を入れる。 校内OJTの推進により、一人一台端末の授業での積極的な活用を進めることができた。	課題	体力テストの結果において、国や都の平均を下回るものが多く見られた。運動遊びの日常化や学校全体で取り組む体力向上の取組、体育科の授業改善を進めることが課題である。

重点	取組項目	具体的な取組内容	数値目標	達成度		「中間」自己（学校）評価(A～D)		「中間」学校関係者評価(A～D)		「年度末」自己（学校）評価（A～D）		「年度末」学校関係者評価（A～D）		次年度に向けた改善案
				9月	2月	評価	コメント	評価	コメント	評価	コメント	評価	コメント	
学力の向上	○学力向上プロジェクトチームの取組推進 ○校内研究の推進 ○一人一台端末の効果的活用	・電子ドリルを効果的に活用し、知識・技能の習得を図る。 ・国語科「読むこと」に重点を置いた校内研究を推進する。（1年次）	・全国学力・学習状況調査、算数において、平均正答率昨年度比＋3ポイントを目指す ・全国学力・学習状況調査、国語「書くこと」において、東京都平均を目指す	B	B	C	●全国学力・学習状況調査において前年度より、平均正答率がー1ポイントになった。 ●今年度は国語算数ともに、読解力を要する問題の正答率が低かった。校内研究で「読むこと」の研究により力を入れる。	B	・読解は、どの教科の学習でも必要であり研究で取り組むことに意味がある。 ・算数は、途中でつまずくとなかなか取り戻すことが難しい。 ・興味を引く「面白い」授業を取り入れることも必要。	C	○今年度学力向上委員会を設立したことで、全校の教員で学力について取り組むことができた。 ●初見の問題に対して、読み解いたり、最後まで取り組んだりする力が弱く学力テストでの結果が振るわなかった。	C	・国語の力、文字情報が弱い。タブレットは便利だが、タブレット学習の影響もあるのではないか。 ・令和8年度に都の平均に追いつくという目標があるが、達成できそうなのか。	・国語科の校内研究が2年目になるにあたり、読むことの力をつけていくために教員の指導力向上を目指す。 ・学力テストのようなテスト様式に慣れるために過去問題に取り組む。
	○読書科の更なる充実	・東部図書館から派遣されている司書と連携し、読書への興味関心の向上を図る。	・全学年級、週1回以上学校図書館を活用 ・読書週間を年2回実施	B	B	B	○低学年を中心に図書館を積極的に利用できた。 ○司書との連携を密にし読み聞かせなどを行った。	B	・読書は学習に役立つので大いに取り組んでほしいが、最近の子はなかなか読書に興味がない。	B	○今年度は「読書月間」を2回設け、また委員会活動で読書を促す活動を多く設けることができた。	B	・児童は自分の好きなことや得意なことについての探求心があるので、そういった書籍を増やすことも必要である。	・東部図書館と連携し、読書に慣れ親しむ。 ・教員や保護者が読み聞かせに取り組む、読書への意欲を高める。
体力の向上	○体力テストを効果的に活用した運動能力の向上	・体力テストの結果分析を活かし、体力の課題に応じた体育学習の工夫改善を図る。	・20mシャトルラン、立ち幅跳びにおいて都の平均以上を目指す	C	B	B	○握力、立ち幅跳びは都の平均を上回った。 ●20mシャトルラン、長座体前屈は、都の平均を下回った。	B	・体の柔軟はけがを防ぎ、運動技術を高めるので大切。	A	○昨年度に比べ、多くの種目で都平均を上回ることができた6年生の体育大会では上位入賞者を多く出すことができた。	B	・概ね達成できている。	・持久力を高めるためになわ跳びウイークを活用したり、学校独自の取り組みを行っていく。
	○「江戸川っ子なわ跳びチャレンジウィーク」の取組を始めとする体力向上の全校的な取組の充実	・学期1回の「江戸川っ子なわ跳びチャレンジウィーク」及び、「持久走週間」（2月）の設定により、運動意欲を向上させ、課題である「持久力」「跳躍力」の向上を図る。	・児童へのアンケート結果で、80%以上の児童が体力を高めようとしていると回答を目指す。 ・全学年で体力テスト（6月実施）における、体力合計点、東京都平均以上を目指す	C	B	B	○「江戸川っ子なわ跳びチャレンジウィーク」では、全校児童が休み時間に積極的に運動に取り組んでいた。 ●6月実施の体力テストでは、学年によって差があるが、概ね「持久力」と「柔軟性」が東京都の平均に満たなかった。	B	・ゲストティーチャーを呼んでなわとび出前授業を行ったり、「江戸川っ子なわ跳びチャレンジウィーク」を設けたりしたことでは効果が見られている。	B	○なわとびカードや到達度チェックの仕方を改善することによって、児童の意欲を高めることができた。	B	・なわとびなどは今後続けて欲しい。	・なわ跳びウイークへの取組は積極的になっているので、より質を高めるための取組を行う。
共生社会の実現に向けた教育の推進	○インクルーシブ教育の推進	・誰もが排除や分離されることがなく、必要な支援や教育を受けることができるための環境づくりを進める。	・毎日1回以上、授業の中でタブレットやテレビを活用して、個別の学びを支援 ・特別支援校内委員会を月1回以上開催	A	A	A	・日常的にタブレットやテレビなどのICT機器を積極的に用いて、授業を行うことができた。 ・定期的に特別支援委員会を行った。	B	・学習にICTを使うことは有効的だが、フィルタリングなど大人がしっかりとコントロールすることが必要。	B	○ICT機器を使うことによって学習の幅が広がった。 ○定期的な特別支援委員会の開催や外部機関との連携によって、支援をおこなうための環境づくりができた。	C	●タブレット学習は便利ではあるが、やったつもりにて本当に身につけているのか、疑念がある。またそれに伴うリスクの方が大きく保護者へ呼びかけが必要である。	・タブレット学習は利便性が高いが、今年度はSNSトラブルが発生したので、ネットモラルやマナーの指導に力を入れていく。
	○副籍交流、交流及び共同学習の実施・充実	・特別支援コーディネーターが中心となり、特別支援学校の児童と直接交流又は間接交流を計画、実施する。	・副籍交流校と、毎月、学校便りや学年便り等を交換し交流	B	B	B	・副籍交流の計画を立てたが、事情により中止になり、直接交流ができなかった。	B	・来年度以降の継続的な活動に期待する。	B	・副籍交流の計画を立てたが、事情により中止になり、直接交流ができなかった。	B	・来年度は是非交流をしてほしい。	・来年度は、直接交流ができるように連携をとっていく。
不登校・いじめ対応の充実	○教育相談の強化	・SCや特別支援教室専門員、SSWなどに相談しやすい環境づくりを行う。	・毎月、各機関と連絡を取り情報共有	A	A	A	○困り感のある保護者や児童に対して相談しやすい環境を提供し、外部機関とも積極的に連携した。	A	○様々な児童や保護者に対して、継続的に対応して欲しい。	A	○登校や学校生活に不安を抱えている児童に対して、SCをはじめ外部機関につなぎ相談場所を広げることができた。	A	○困り感のある保護者や児童に対して相談しやすい環境を今後作り続けて欲しい。	・今年度同様、各機関と連携しきめ細かな対応を行っていく。
	○個に応じた支援の充実	・生活指導夕会を通して、配慮が必要な児童の校内での共通理解を行い全教員で全児童の支援や指導の充実を図る。	・毎週1回の生活指導夕会で、共通理解	A	A	A	○生活指導上の課題には学年単位で対応するようにし、管理職も含めてチーム学校で取り組んだ。	A	・生活指導上に課題がある児童の対応は、学校に留まらず生活安全課職員やOBに相談することも有効。	A	○学習や発達で支援を必要とする児童に対して、積極的な面談をして個に応じた支援を進めた。	A	○今後も外部機関を有効に使って生活指導を行ってほしい。	・全教職員で、在籍児童についての共通理解を行う。
	○児童の居場所づくり	・配慮を要する児童に対し、エンカレッジルームを効果的に活用し、個に応じた適切な支援を行う。	・週3回エンカレッジルームを配慮を要する児童の居場所として活用	A	A	A	○不登校傾向のある児童に対して、特別支援教室専門員がコーディネーターとして別室登校を計画し、登校を促すことができた。	A	○引き続き児童の居場所づくりを行うことで、児童の登校を促してほしい。	A	OSS、SSWやユースサポートを活用し児童の登校をや出席を促すことができた。	A	○今年度同様、個々に応じた居場所づくりを行ってほしい。	・来年度は、エンカレッジサポーターを活用し、居場所づくりを行う。
学校（園）開かれた地域社会の実現	○学校ホームページの充実	・学校ホームページを通して、教育活動の周知を図る。 ・学校便り、学年便り等のデジタル配信を通して、利便性を向上させる。	・学校ホームページ（学校日記）を毎日更新 ・学校便り、学年便り、保健便り、給食便り等のデジタル配信（月1回）	A	A	A	○学校ホームページで児童の学校生活の様子を周知することができた。	A	○HPで、頻繁に学校の様子を知ることができた。	A	○学校ホームページのデザインを見直し、見やすい構成に変更した。各行事ごとに児童の様子を発信することができた。	A	・学校ホームページが充実され、児童の学校での様子がとてもよくわかる。内容が随時更新されることを楽しみにしているとの声を聞く。	・今年度同様、行事に留まらず、学校生活の様子を発信していく。
	○学校関係者評価の充実	・行事ごとのアンケートや年一回の保護者アンケートを実施し、保護者や地域の意見を教育活動の充実に活かす。	・webを活用した効果的なアンケートの実施 ・年3回の学校評議委員会の実施	B	B	B	○学校公開や運動会等の学校行事後に「アンケートフォーム」を活用した効果的なアンケートを実施することができた。	B	○「アンケートフォーム」の活用は、意見を集約しやすいことでよい。	B	○今年度Tetoruを活用して学校評価を行うことができた。 ○年3回の学校評議委員会や年一回のPTA会長連絡会議などで情報を共有することができた。	B	・引き続き、保護者や地域からの意見等を参考にして、教育活動を進めていくことを期待する。	・保護者や地域の声を幅広く受け止めることができるように、システムを改良していく。
教育の展開	○学校における働き方改革プランに基づく取組の推進	・定時一斉退勤日を設定する。 ・分掌ごとの仕事内容を見直す。	・全校定時退勤日を月1日、学年ごとの定時退勤日を月1日設定 ・定時外在校時間月45時間以上の教員、月5人以下	B	B	B	○定時一斉退勤日や学年ごとの定時退勤日の設定により、早めの退勤を促すことができた。	B	・先生方の働き方改革を進める上で、放課後のトラブル対応は保護者が行うようにPTAやPTAOGも協力して伝えていくことが必要である。	B	○一斉退勤日や学年ごとの定時退勤日を設けたことで、退勤時間が早くなり、3学期は・定時外在校時間月45時間以上の教員、月5人以下となった。	B	・教職員が日々心身ともに健康な体で教育活動に取り組んでいくために、働き方改革をさらに推進していくことを期待する。	・働き方改革を目指し、様々なシステムが導入されているので、活用し勤務時間の短縮を目指す。 ・放課後のトラブル対応を引き続き、警察や地域にお願いをしていく。
	○児童の自主性の育成	・異学年交流の取組を年間を通して実施する。 ・ノーチャイムでの学校生活を実施する。	・「なかよしタイム」を年7回実施 ・「なかよし退足」を10月に実施	A	A	A	○「なかよしタイム」では上級学年を中心に異学年交流を楽しむことができた。 ○ノーチャイムによる学校生活が定着している。	A	・放課後の遊び方や服装の乱れなどは、目的のやりだいたいことがないのでは。目的を持たせることが大切。	B	○なかよし班遊びを重ねたことで高学年は低学年を思いやり、遊びの計画を立てられるようになった。	B	・児童の自主性がさらに高まり、様々なことに意欲的に挑戦する気持ちを大事にしていってほしい。	・異学年交流を通して児童の心の成長を目指す。 ・異学年交流の意図をしっかりと、理解して取り組ませる。